

第2回活力ある農山漁村づくり検討会における主な意見

- 事務局から資料1、2について説明。
- 委員からの意見
 - ・ 山村は、戦後、木材を供給し、炭でエネルギーを供給し、都市に労働力を供給してきた。この3つが行き詰まっていたが、再生可能エネルギーのフィールドとして今注目されている。太陽光、風力、波力のほか、小水力など、多くの農山漁村地域に資源があるのではないか。地域の未利用資源を把握し、外から買っていたものになるべく地域内で賄うことで地域外に富が流出することも少なくなる。
 - ・ 未利用魚の活用は、漁村の生活文化と密接につながる。定置網で捕れる魚の1割くらいしか市場に出回っておらず、残りの9割の雑魚の利用に注目してはどうか。
 - ・ 最終的な施策のゴールをどこに置くかが見えていないような気がする。目標と課題を如何に設定し、そのために何が必要かを整理していく過程で、資料2の3つの課題設定が適切かを考える必要がある。
 - ・ 年齢階層別の転出入者数が整理されているが、15～64歳の階層をもう少し細かく分けて分析できないか。地域ごとの差異や、あるいは高校進学時、大学進学時などライフステージごとに把握できれば、転出入の要因が分かるのではないか。
 - ・ 具体的な農山漁村づくりを行う組織や地域単位について、どのような範囲で考えるかを明らかにすべき。
 - ・ 地方都市にも若い方がたくさん住んでおり、「マイルドヤンキー」という言葉を聞くようになったが、こうした地元志向が強くて地元に残りたい若者を農村に向かわせることができれば、裾野を広げていくことが出来る。
 - ・ 資料2の3つのテーマは、農山漁村の人口をいかに支えていくかという命題に集約されるのではないか。
 - ・ これまででは、大規模集中型の政策により、端が切り捨てられてきたが、

これからは、たくさんの端を結びつける結節機能が重要となってくるのではないか。

- ・ 活力ある農山漁村づくりには、拠点、手法、人材も必要であるが、それらをしっかりとマネジメントする組織が最も重要である。
- ・ 先進事例に共通しているのは、相当な危機感を持って個性的な地域経営をしていること。首長が明確なビジョンを持っており、かつ、現場の公務員が社会的企業のように豊かな発想をしている。農山漁村において、このような職員が増えているところに注目している。
- ・ 農山漁村の取組を成功させるためには、市町村の取組に加えて、若い起業家の取組を加えることが重要。被災地では、田舎のない方が組織を飛び出し、小さなビジネスや新たな社会的価値を見いだすために田園回帰している。
- ・ 「活力ある農山漁村づくり」の「活力」には、「仕事を増やす」、「豊かな暮らしを増やす」、「仲間を増やす」という3要素があると考える。現住者も含めたコミュニティづくりの観点へのアプローチが弱いように思う。
- ・ 集落連携が今回のビジョンのひとつの出口となると思われる所以、さらにその方向で議論を深めるべき。このほか、都市と農村の共生・対流という要素も必要である。
- ・ 東日本大震災が残した教訓は大きい。大都市生活のもろさや便利さだけが全てではなく、共同で暮らすことの大切さが認識された。これらは農山漁村での暮らしが持っている魅力と結びつく。
- ・ 都市にとって農山漁村とは何か。都市の持つ文化や力と農山漁村の持つ生活様式の接合が必要である。
- ・ 農地・農道の資源管理は、（单一）集落の自己完結なのか、他の集落を跨いだ応援態勢があるのかどうかが重要だと考える。資源管理の応援態勢があって暮らしが守れて人が住めているのか、そうした体制が無くても人が住めているのかどうかを詰めておく必要がある。
- ・ これまでの「都市軸・グローバル社会」とは異なる「田舎軸・ローカル

社会」を考える必要がある。そこでは、持続可能な社会をつくっていくことが求められている。

- ・ 近頃、田舎でダイナミックに生きていく、田舎から世の中を変えていくこう、といった風が吹いており、このことを大切にする必要がある。
- ・ 今回紹介された事例は、いずれもトップランナー（先進事例）であり、他の市町村との格差もある。一般化できる要素を見つけてボトムアップを図るのか、事例をどのように扱うのかを考える必要がある。
- ・ 今日の議論をまとめると、
 - ① 活力ある農山漁村づくりの目標を大胆に明らかにする必要があり、その中には東日本大震災以降の日本社会のあり方といった要素も入ってくるのではないか。
 - ② 農山漁村づくりを進めるためには、組織や地域単位が必要であるが、その内容や規模をどのように考えるのか。
 - ③ 農山漁村では、行政だけでなく、民間主体が社会的企業としての役割を担っている点にも留意すべき。
 - ④ 集落間の連携や都市と農山漁村の共生・対流といった空間的な連携について、さらに議論すべき。
 - ⑤ 今回提示された事例は、先進事例というより先発事例であるとも言える。これらの事例を取り扱う視点も重要ではないか。
- ・ 農山漁村における暮らしの舞台として、1000人～1500人程度の地域にフォーカスしてはどうか。
- ・ 市町村合併によって目を配れなくなった地域がある。地域づくりは市町村の仕事であると考えるが、これに都道府県、国がどういう関与をしていくのか整理する必要がある。このテーマに関わる統合交付金やデータベースをつくり、市町村の政策立案の支援をすることが考えられる。
- ・ 資料2のテーマからは、ツーリズムや福祉など抜け落ちている。その他、日用品などの移動販売も重要である。

以上